

エスペラント語訳「水平社宣言」に寄せて

友常勉

日本エスペラント協会の機関誌『La Revuo Oriental』二〇二五年三月号に、上川伶訳によるエスペラント語「水平社宣言・綱領」が掲載されている。西光万吉がエスペラント語を学んでいたことや、全国水平社の機関誌『水平』第一巻第一号（創立大会号）の表紙に、「水平」のエスペラント語 LA HORIZONTALO が付されているように、水平社創立メンバーにとって、エスペラント語は新しさを誇示するファッション以上の意味があった。エスペラント語は今日ではリンガ・フランカ（言語間の橋渡しをする第三言語）として理解されるが、創始者であったザメンホフは、同時に異宗教間の橋渡しとなる宗教であるホマラニスモ（ヒューマニズム）を提唱していた。地上に存在する対立や憎悪の根源的な解決を求めていたのである。

ところで「水平社宣言」の思想的な淵源を示す水平社創立趣意書『よき日のために』は、親鸞、ストリンドベルリ、ウィリアム・モリス、ロマン・ロラン、あるいはゴッリキーらの宗教書・文学書・思想書からの引用によって構成されており、水平社が生まれた思想の増幅の強度を私たちに伝えてくれる。それは輸入・翻訳された思想と、仏教思想をはじめとした教済の言説を融通無碍に組み合わせて固有の主張にした点で、近代日本思想史上のひとつの達成点でもある。その独自性について、西光や阪本清一郎らの創立メンバーはきわめて自覚的であったと考える。そして機関誌『水平』創刊号に掲げられたエスペラント語は、マルクス主義でもアナキズムでもなく、

前例のない単独者の道を自分たちが踏み出していることを内外に喧伝するものだったと思う。「熱と光」で括った「宣言」が有する高揚は、ザメンホフのホマラニスモの、宗教的救済的な熱情に通じるところがある。そもそも「水平」という翻訳語の選択にあたって、彼らは、「革命」「平等」という語では言い足りない、身分的階級的解放の独創性を表現するため、トルストイや、アナキズム美術の系譜に位置する評論家エドワード・カーペンターなどが暗示的に用いていた「水平」という語を、イギリス革命最急進派のレヴェラーズにひきつけながら使用したと考える。

なお上川訳エスペラント語「水平社宣言」は、注記をつけながら原文に即して「兄弟よ」「男らしき」もそのまま逐次訳している。これにかかわって、呼びかけ文などで「兄弟姉妹よ」とすることがすでに常識であった当時の社会運動のなかで、女性嫌悪と男権主義を伴うこれらの表現を排外的に選択したことも、実際には自覚的なふるまいであったとみななければなるまい。幸徳秋水などの国内外の社会主義者たち、さらには平野小剣もその「檄」で用いていた「兄弟姉妹」という常套句に対する自己区別がそこに働いていたと私は考える。『阪本数枝日記』などの解説によつて、初期水平社におけるジェンダー論は大きく進展しているが、新たな社会運動がひとつの言語革命を必要としたという含意において、それがはらんでいた性差別主義を扱う必要があるだろう。そうした「水平社宣言」の内在的な理解と批判は、世界で進行している今日の社会運動との連帯のために必要なことだと考える。

（注）ただし原テキストでは LA HOYIZONTALO と表記

ともつねつとむ／東京外国語大学大学院国際日本学研究院教授、東日本部落解放研究所理事